社会（地域・福祉・企業の連携システム）が支える、
学校教育終了後から生涯にわたる継続的な学びの実践研究事業
～ コミュニケーション経験を基盤とする生活・就労支援プログラムの構築～

2018～2020

3年間の総括
「超」「続」「探」的な

学びの場

2018年、2019年、そして2020年。

いろいろな方向に学びの矢印が続き、あちこちにつながり拡がりました。

企業への調査で得た生活や就労における学びのニーズを元に、『しごとの意義』、『生活をつくる』、『選挙に行くってそういうことか！』などの10のテーマでプログラムを実施した1年目。「泥棒はしごと？」、「電気にガスに…スマホ！wi-fi！」、「いつも投票する人は顔で決めています」等々、プログラムに参加した当事者のありよう、当事者『感』は驚くほどに、個々それぞれ。スタッフは、ひとりひとりの『感』を知ることから始めなくちゃ！と気持ちを新たにしました。しかも、設定されたテーマを見返し「これは、企業が考える、彼らに学んでほしいことだった！」と、本人たちを置いてけぼりにしてしまった余計なお世話を大反省・・・

そこからわたしたちは『当事者の主体性がある学び』とはどのようなものか改めて考え始めました。彼らは何を学びたいと考えているのか、そもそも学びたいと思っているのか、そうした根本的な問いかけも含め、千差万別な当事者『感』をいかしてプログラムを設計するためにはどうしたらいいか。

結果わたしたちは、彼らを『参加者』として固定化せず、企画のプロセスからかかわってみたらどうか？と思い立ち、事業のプログラム開発を担うワーキンググループ（障害福祉の分野にとどまらない多角的な専門家で構成）にいきなりダイブ！これが思わぬ方向に好展開しました！

「お金や時間やエネルギーを使ってまで、どうして恋愛や結婚をするんですか？」「履歴書に学歴を書かなくても大学に行きますか？」等々、彼らはわたしたちの『当たり前』や『常識』にドンドン問いかけてきます。『正解』に辿り着いたと勘違いし、学び終わったものとして蓋をしている物事が、自分や社会の中にこんなにもあったのかと、わたしたちは彼らの問いかけにより気付かされました。

そして、これこそまさに、彼らの『とくい』なのではないかとピン！ときたのです。こうして、彼らの『とくい』をいかして、年齢・性別・立場を超えて双方向に学び合う『超大学』が生まれました。これまで、大学生や企業関係者と『超大学』を実施し、当事者のさまざまな問いかけから、自分自身や社会の常識や当たり前を問い直すという人が続出しています。当事者の『とくい』をいかした学びが、これからも社会に気付きや変革のきっかけをもたらし、社会における新たな役割を得るなどの道筋をつくるものと期待しています。

一方で、『学び』と聞くと『学校』を思い浮かべる人も多いと思いますが、学校時代に悲しい経験をしている人たちの多さには驚かされます。

「先生は話を聞こうとしない。面倒くさがる」「先生が机を蹴った！ガキかよ！」「先生に早くって言われ過ぎてパニックになった」という声。ある方が「学校で学んだことと言えば、我慢することと、自分たちが下の位置にいるということでした」と話していて切なくなりました。学びの場であるはずの学校で、心に大きな傷を負い、そのまま社会で生きている人たちがいるのです。

自分が学ぶ価値のある存在であることなど、もはや見失っているような彼らを目の前にして、わたしたちは学びの機会を創る大切さと同等に、そのレディネスを整えることも必須だと考えました。年齢・性別・社会的立場を超え、『人』としてかかわれる仲間がいて、安心して学びにつながる一歩（失敗と呼ばれることもある）を踏み出せる場があることで、ひとりひとりの『とくい』は輝きを放ち、社会とつながりを持つのだと考えています。

わたしたちは彼らとともに意欲的に学びの場をつくる挑戦を続けてきてましたが、事業拠点のある練馬区は、昭和52年から始まった心身障害者青年学級が現在においても障がいのある人たちの学びを担い、また社会参加に向けた福祉施策を積極的に展開している地域です。文化・芸術に関する活動から生活・仕事に関する様々な学びの機会等があるほか、区内には障がい分野という立場を超えた地域住民・地域活動団体としての交流やその機会が増えています。当然ながら、わたしたちはこうした練馬区の特性をふまえつつ、でもこれにとどまることなく、これから先も彼らの『とくい』が社会の中で予想外の展開をもたしてくれるとワクワクしながら事業を継続していきます。

OPEN 講座のしくみ

さまざまな人とのコミュニケーション機会をつくり、人とのやりとりからの気付き…
自ら主催するばかりでなく、地域内の他団体と協力したり、参加の立場を変えるこ…

OPEN 講座のコツ

- 自分たちの思いと同様に、相手の思いも大切にする
- 楽しむことと、真面目にやることを両立させる
- 外に出ることをこわがらない
- できあがったプログラムをアップデートする意識を持つ
- 「参加」という形にこだわらない

学びの場

学ぶことに対する自発的なモチベーションがあり、多様性豊かな人たちとの双方向のコミュニケーションを志す学びの場を創出する。

地域で活動する様々な団体や個人と連携し、より多様な人たちが参加する際の情報閲覧と申し込みができるウェブサイトを立ち上げ、その全体を学びの場「ここのがっこ・ねりま（仮称）」と位置づける。

互いの学び合う場でありながら、地域内でのコミュニティの拡大や、新たな活動への展開なども視野にいれた運営を志す。

学びとは・・・

- 「超」 分野や立場や常識を超えて
- 「続」 新たな問いを生み出しながら続いていく
- 「探」 ゆたかに生きるために考え探求していくこと

地域内のあらゆる団体・個人の連携でつくる
学びのプラットフォーム
「ここのがっこ・ねりま」
デモウェブサイトURL nerimanabi.jp

2020

- 当事者主体
- 地域活動団体や行政とのネットワーク

i-LDK

ダイバーシティ発信基地

More Time ねりま

障害福祉サービス生活訓練事業

2019

- 当事者「感」からはじまる学び
- 当事者のとくいをいかす
- 当事者が講師になる

OPEN

プログラム内容からの学びはもとより、参加者同士が交わるコミュニケーション機会から得る学びの派生を期待して実施される、誰もが参加できるように一般に開かれたプログラム。

外部講師を招く、他団体の企画と連携する等、そのプログラムづくりにはいくつかのポイントがあることがわかった。中でも、障がいのある当事者自身の得意を活かしてプログラムを主宰するという立場を替える方法は、主宰するという責任感から得るものは他に比べようもなく大きな学びでもあり、社会生活を送る糧ともなりうる。また、そうした経験を経て、外部や社会に対して自らを開いていく、精神的な成長が促されることもある。

CLOSED

参加者が限定されていて、プログラムのテーマ、内容、進行ペースが、障がいのある人や個々の参加者に沿うようにつくられている共同学習の場。2年目に、本人たちが生活していく中で気になっていること、必要性を感じる物事からテーマを決定した。そのことがきっかけとなり、日々の生活の中でより実践的なテーマを設定し、みんなで意見交換しながらつくり出す場の必要性を明確に意識するようになり、主体性ある学びはそこにおのずと発生することがわかった。

2018

- からだと表現
  - 「ゆるゆる体操」
  - 「はじけるリズム」
- 文化教養
- 栄養と健康管理
- 防犯・防災
- 地域活動・社会参加

主催講座
- クリスマス会
- 自主活動
- 「人間・性と生」
- 「仕事の意義」
- 「生活をつくる」

- 企業や支援者のニーズ発
- いろいろな人と交り合うプログラム
- 練馬区とのタイアップ

「くらしのちぐはぐ研究室」

恋愛と結婚、仕事、食生活などをテーマとしてプログラムを1年目、2年目と行ってきた。3年目はテーマがなんであれ、それらを共有すること自体が当事者にとって自分の状況を俯瞰し、他者の意見に耳を傾ける機会であり、有益であるということから、演劇家の柏木陽氏とともに「くらしのちぐはぐ研究室」を立ち上げた。当事者の抱える疑問や困りごとを出し合い、それを演劇として客観的に表現する。そのプロセス中では当事者の変化ももちろん感じられるが、参加する支援者にとっても、当事者それぞれの当事者”感”を知るためにも有効なプログラムである。

「くらしのちぐはぐ研究室」制作動画プレイリスト（8本）▶

ON LINE

「超福祉の学校2020オンライン」出演

自主活動「リアルおままごと」

仕事「わたしのトリセツ」

連携協議会

（関係者ミーティング）

『障がい者の学び』が、余暇的なイメージを超えて当事者の自立や社会への貢献につながるものであるということは、事例もない中では到底考えづらいことであったと推察するが、連携をはかろうとする際にわたしたちの目指す学びのイメージを共有してもらえないケースが多くあったと感じている。たとえば、学校教育においては、『自立=就労』といったイメージが強く、生涯学習への移行を見据えて、高等部に在籍中から地域の学びの機会に参加していく余裕などない雰囲気があった。学びが就労に対立するものとして位置づかないよう丁寧な関わりが必要だと考えた。

年に数回程度の連携協議会であるから、まずはこの取組みへの意義を理解し、共感し合える現場ベースでの関係団体との関係づくりを丁寧にしていきたいと考えた。

練馬区には障害者青年学級や障害者地域生活支援センターが提供する学びや社会参加の機会があり、また障がいの枠を超えて若者の自立支援を担う事業所とも課題が共有でき、輪が拡がった。結果として縦割りを超えた社会教育・障害福祉・地域の各分野との連携に至ったが、コロナ禍においてはこうした連携協議会の場が、不要不急かと問われる学びの場を継続する大きな役割を果たすことになった。また、会議に参加した当事者が自分たちの学びについて語る姿には、何度となく現場が励まされたことも事実としてあり、方向性を検討する上でもなによりの説得力を持つと考える。

今後は、当事者のニーズを丁寧にくみ取りながら、現場ベースでのプログラムのアップデートやスタッフの育成につなげていくだけでなく、当事者が中心となってさらなる連携を推進していくことによって、多様に学びの場が進化・拡充していくことを期待している。

WG

ワーキンググループ

続・「選挙に行くってそういうことか」

勝手に検討会 障害者計画編

練馬区障害者計画の中に「障害者の学び」が！

これまで障害者計画の中で「学習」や「学び」ということについて触れられていなかったが、私たちの実践を伝えることを通して、その必要性への理解が進み、次期練馬区障害者計画の中に「障害者の学び」の項目が追加されることとなった。

「大学に入って良かったと思うことは？」というわたしたちからの質問で、学生さんたちが「世界が拡がった」とか「いろいろな人と出会えた」とか話していたけど、大学じゃなくてもi-LDKでも同じ経験ができていると思いました。i-LDKは世界が拡がるし、やりたいことがやれるし、しかも期間がない永久の私たちの大学だと思いました。」
（超大学：なっちゃんの感想）

超大学

あらかじめ設定されたテーマについて、障がい当事者と一般参加者がディスカッションするプログラム。障がい当事者に出会う機会の少ない参加者にとっては、議論を通じて、それぞれの生活のあり様のちがいを知る経験でもあり、当事者からのまっすぐな意見や質問に心揺さぶられ、会の終了後も自ら問い直しをすることがある。それは、教え／教えられる、支え／支えられるの構造をくつがえし、相互に刺激を受ける場としてこの超大学が機能することを表す。思い込みや常識や通説に気付き、物事の認識や考えを問い直すような機会は意外と少なく、それによって幅広い思考や視野を獲得することにもつながっている。

障がい当事者にとっては、以下のようなコミュニケーションスキルの発達可能性が想定される。
・自分の考えに固執せず、他者の意見を受け入れる
・他者の意見を鵜呑みにしないで、自ら考える
・他者の知見や考えを活かす

静岡大学　地元企業　上智大学

コーディネーターってどんな人？

【人柄やとくちょう】
- 自分の「専門性」にこだわらない
- 日常生活の中のおかしなところに気付ける
- 当事者たちとSNSを介したコミュニケーション手段を
- 日頃から使っている
- 当事者の声に気付ける、聞ける
- 当事者を中心にできる
- 計画にとらわれない
- 表現の方法にこだわりを持っていない
- 楽しいかどうかを大事にする
- 自分の知らないことに興味をもって手をつっこめる
- 人から声をかけてもらえる
- 無理に言語化しようとしない
- 「上手くできない」くらいがちょうどいい

【プログラムの企画や実施に関係するスタンス】
- 当事者目線で考えられる
- ちゃんとやろうとしない（“つっこむ”という参加の余白がある）
- 既存の方法や想定を外れたとしてもパニくらない
- 途中での変更を楽しめる
- 一緒に遊ぶ
- 決めごとや楽しさを、みんなとシェアするのに労をいとわない
- いろいろな人を巻き込める（いろいろな人の力を借りられる）
- みんなの学びを意識する
- 成果ありきではなく、みんなが参加するプロセスを重視する（おのずと成果はついてくる）
- モヤモヤをみんなと悩むことを大切にする
- 最終的に実績や成果をとりまとめられる（横串を通せる）
- お金を集められる